

巻 頭 言

里山学研究センター センター長

牛尾 洋也

「里山」は、人の手が入ることによって維持されてきた自然であり、里山の環境を守ることは、里山における人間と自然との共生的な関係を全体として維持することを意味します。さらに、環境保全への実践的関心の増大こそが「里山」概念の発展を促したといわれるように、「里山」問題は広く環境問題の中に位置づけることができるでしょう。

その意味では、里山研究は、広義の環境問題に対して独自の問題領域と対象および視角を有しており、社会のあり方や循環型システムを内包した一つの社会モデルを展望するうえで、その重要性がますます認識されつつあるといえます。

2012年度から始まった学内資金による本指定プロジェクト「里山モデルによる持続可能社会の構築に関する総合研究」所定の3年間の研究期間は、今年度で終了します。多くの方々の多大なご協力により、計20回にのぼる研究会開催と3度のシンポジウムの開催（「21世紀の景観とまちづくりサミット in 京都 文化となりわいの景観・地域づくり～重要文化的景観の課題と可能性～」、「里山がひらく持続可能社会」、「東アジアからコモンズを考える」、並びに里山フォーラム2013や第9回京都・環境教育ミーティング、第10回大学間里山交流会「大学の里山をどう活かすのか」などに参加・協力しました。また、3冊の年次報告書と1冊の出版物（『里山学講義』晃洋書房、2015年3月刊行予定）を上梓する運びとなりました。

プロジェクトの表題に掲げた「持続可能社会」の構築を模索した本里山学研究プロジェクトの3年間は、2011年3月11日の東日本大震災および福島原発事故とその後の復興の経緯を意識し続けた期間でした。

ドイツの環境史研究者の第一人者であるラートカウは、フクシマの事故後にその著書に加えた「日本語版へのあとがき」のなかで、原発事故をめぐる新しい問題状況に対し次のように指摘しました。「自由な公共的議論のないところには、真の進歩も学習過程も存在しない。」と（ヨアヒム・ラートカウ『自然と権力 環境の世界史』[海老根剛・森田直子訳] [みすず書房 2012年]）。

折しも、新たに登場した地方消滅論やコンパクトシティ論、地方創生戦略や再生可能エネルギー問題、空き家問題など、里山を含む日本社会の将来像が厳しく問われており、これからも、「里山」概念と里山学の研究蓄積とを手がかりに、新たな社会モデルについて公共的に議論を重ねてゆきたいと思えます。

2015年2月5日